
とある世界の幻想書庫

i&r

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある世界の幻想書庫

【Nコード】

N8945Y

【作者名】

i&r

【あらすじ】

ある日突然死んでしまった青年。その原因は神のミスというなんとテンプレな展開で二つ返事でとあるの世界に転生する事に。新たな世界で彼は一体何をするのか!?

原作ブレイクやクロスオーバーが苦手という方は見るのを遠慮するのがいいかも？

プロローグ（前書き）

どうも初めまして読者の皆様。作者の？&rで御座います。
原作やアニメを見ていたらつい書きたくなって書いてしまいました。

処女作ですので暖かい目で見守って下さい。

それではどうぞ！

プロローグ

目を覚ますとそこは何も無い真っ白な空間だった。

「……………知らない天jy：空間だ」

こういった場面のお約束みたいなセリフを言ってみた。因みに言い直したのは立っているのか浮いているのかも判らない曖昧な状態だから。

「何でこんなトコに居んだろ？」

記憶の糸を辿ってみるか……

〈回想スタート〉

その日俺は何処にでもある様なマンションの一室で本を読んでいた。

「……………眠イ」

幾ら暇だからってこれだけの量の本を一気に読み返すのは流石に無茶だったか？と目の前のテーブルに積んだ読み終えた本の山を見る。ファンタジーだったり学園物だったり元ネタがゲームだったり様々であり、それ等全てを含めた総数は約200冊で半数以上がラノベ。

それらを一気に読めは如何なるか……

「酷エ顔だな」

鏡を見て呟く。

目の下には『それってメイク？』とツツコミが入りかねない程の隈が出来ており、髪もボサボサでちらほらと枝毛が目立つほどに荒れている。

「流石に五徹はやり過ぎた……寝よ」

フラフラとベットに向かいそのまま倒れ込む。

（あっそっぴや今日って新刊の発売日じゃん！起きたら買いに行かない……い……と）

そう思いながら意識が薄れて行き、直ぐにいびきを掻いて眠りだした。

く回想終わりく

そっぴや！俺、五徹して本読んでそのまま寝たんだっつた。……っつて事は、ここは夢の世界か。そっぴやと判れば……

「寝よ」

「寝るな！」（ドコンッ！）

いきなり背後から誰かに頭を殴られた。振り返るとそこには真っ白な翼を持った金髪の女性が一棘付きバット（エス〇リ〇ルグ）を肩に担いで立っていた。色々と言いたい事はあるがまずはこれだろ。

「…えっと、まさかその撲殺バットで俺の頭を殴ったのか？」

「そうよ、私は流血沙汰は嫌いだから中は空洞のゴム製で表面にメタリックの塗装なんだけどね」

そう言っつてバットをグニャッと曲げてみせる女性。まっ、どうせ夢だし本物でも痛くん「夢じゃないわよ」・・・は？

「夢じゃないって…俺、五徹明けでそのまま寝たはずなんだけど夢じゃないってどゆ事？」

「ちゃんと説明するわ。少し長くなるわよ」

別に構わないと答えると淡々と話し始める。

説明は一時間ほどで終わった。

「つまり今話を要約すると貴女は天使で上司の神が書類整理中にお茶を零し、俺の書類の寿命の欄を滲ませ読めなくなりそれによって俺は死んでしまった。そして貴女はただでさえ仕事如山積みなのに余計な仕事を増やしてくれた神をタコ殴りにしてこの事の処理に来た、とそれで間違い無いっすか？」

「ええ間違い無いわ」

そっか俺、死んじまったのか。

「死んでしまったと言うのに随分落ち着いてるわね。普通の人間なら泣き叫んで取り乱したりするのだけど」

「まあ自分の思うまま自由に生きてたから後悔はしていない。で、俺は天国と地獄どっちに送られるん？」

父さん母さん、先立ts…先立つた不幸をお許し下s「どちらでも無いわ」…っえ？

「本来、天界の書類に書かれた寿命が尽きる前に死ぬのは余程の極悪人を除いて存在し得ないわ。そこには一切の例外も存在しない、故に貴方を天国にも地獄にも送る事が出来ない。かと言って元の世界に戻すのも世界が崩壊してしまうから不可能、となると嫌でも別の世界に転生して貰うしかないのよ。此方の過失だから貴方の望みは出来るだけ叶えるわ」

「それはまたテンプレな展開。別に生き返れるのなら別の世界でも良いんだけどその望みつてのはどんな物でも良いん？つてか読心術使った？」

「天界に住む者は殆どが使えるわ。あと責任を取るのは上司だから別に良いわよ」

ニッコリと笑顔で答える天使さん。だが目のハイライトが消えていてちよつと怖い。

「じゃあまずは転生する世界はとある魔術の世界。次に身体能力の上限を無くして鍛えれば鍛えるだけ強くなるように。あと体質で完全記憶能力と能力は自身の記憶している情報を具現化する能力で宜しく」

「ちょっと待ちなさい……………この内容ならあと三つまで追加可能だけどどうする？」

これでもかなりチートにした積もりなんだけど……………まあついでだ。

「それなら世界中のありとあらゆる言語を日本語と同じ様に読み書き話せる様になるのときゅーきゅーキョートに出て来た混沌カオティックとしたリアル実在を自分の意志でON/OFFが可能にするのとジャック・ラカン+川神百分の氣をGNDドライブ方式で欲しい」

流石に無理が有るかな？

「問題ないと最初に言った筈よ。さて、向こうに着けば全て貴方の言った通りになっていくから第二の人生をしっかり生きなさい。ただ一つ、混沌とした実在を使っている時はそれに打ち消されて他の能力や氣を使えないから注意しなさい……………ああ、言い忘れてたけど送るのはとあるの世界に限り無く近い世界だから貴方も知らないイレギュラーが起こる可能s「俺というイレギュラーが入るんだからその位は想定範囲ですよ」そう、では最後に一言」

コホン、と咳払いをする天使さん。

「御免なさい！！」

いきなり深く頭を下げ謝罪の言葉を口にする天使。

何故？

そう思ったがその疑問は直ぐに解決した。立っているという感覚が

消えて足元に黒い穴がポツカリと開いていたからだ。

「こつこついう事は最初に言って欲しかったあああああああああ
あ
」

吸い込まれる様に落ちて行き次第に声も聞こえなくなる。その穴を
天使が見つめていると……

「行ったかの？」

背後に音も無く杖をついた爺さんが現れた。

「はい、たった今送った所です。しかし宜しかったのですか？彼に
本当の事を伝えなくて」

「ミカエルよ、あれだけの陳情を一気に処理するにはうってつけだ
つたんじゃよ。それに知ってしまえば芝居臭くなってしまっしの」

「私は仕事が効率的に進むのならそれで構いませんがこの件に関し

ての今後の処理は全てキッチリとやって下さいよ、ゼウス様」

「分かっておる。元はと言えばワシが気紛れに言った一言から始まったことじゃからの。それよりも配信準備を始めるから執務室へ行
くぞ」

そついうとゼウスとミカエルは霞の様に消えていく。

完全に姿が消える直前、ミカエルは穴を見つめてこつ呟いた。

（我、大天使ミカエルの名において汝、
の第二の人生が幸
多きものであらん事を切に願う）

プロローグ（後書き）

如何でしたでしょうか？

誤字・脱字・感想などがあればどうぞ。

第1話 ギャグパート? いいえ、修行です(前書き)

早速次の投稿です。

それではどうぞ!

第1話 ギャグパート? いいえ、修行です

俺が無事に転生してから早5年の月日が流れた……え? いきなり端折り過ぎだつて? 良い思い出が殆ど無いから話しても仕方ないよ。

「さくで奏志よ、お前も五歳になった事だしそろそろ修行を始めても良い頃かの」

ああ、言い忘れていた。俺の今の名前は鉄奏志くろがねそつし、鉄家の長男だ。因みに今話し掛けてきたのは祖父で名前は鉄陣内。両親はいない……というよりも知らない。転生して最初に気がついた時には爺様に抱かれており両親の顔を一度も見た事が無いからだ。

その理由を爺様に幾ら尋ねても「いずれ時が来れば話す」としか答えて貰えず、その時の爺様の表情を見た俺はそれ以来、その話題を封印して爺様の言うときが来るのを待つ事にした。

それはそうと、鉄陣内

その名前を聞いた時、最初はつよきすの世界なのか!??とも思ったが直ぐに違つと判明した。地図を見るとシツカリと学園都市が存在していたからだ。だが鉄陣内の強さや性格は例え世界が違えども違わないらしい。なぜなら……

「じじ様、修行の内容は?」

そう訊けば

「なぐに奏志はまだ身体も出来上がっておらんからあまり無茶な事

はせんよ。わしが毎年おじやましとる龍穴へ連れて行って氣の効率的な扱い方や何やらを教えるだけじゃよ」(がしっっ)

と答え俺を脇に抱えるのだ。

俺は嫌な予感しかしなかった。日本の龍穴ならまだしもそれが海外に有り、この陣内がつよきすの陣内と同じ性格、強さを持っているなら移動手段はたった一つ。

「えつとじじ様、その場所って日本国内だよね？」

「とっツッ！」

「無視ですか！」

「どうでもよいが黙っとらんと舌あ噛むぞい。では行くぞ！まずは富士の樹海！！！」

ゴッ！！！！(加速)

「グエツ！！！」

いきなりの急加速に俺の視界はブラックアウトしていった。

「何じゃこれしきの加速で気を失いおって、こうなったらとことん鍛える必要があるわいわい。国内の靈泉だけの予定じゃったが世界48箇所龍穴巡りも追加じゃい！！！」

意識を失う直前にそんな声が聴こえた。

……マジでか!?

ここからは長くなり過ぎるので一部のみお伝えします。(by作者)

〔富士の樹海〕

「ほれ着いたぞ、さっさと目を覚まさんかい!!」(ポイント)

ドボンッ!!

「……ちべてええええええ!!」

何だこの水メチャクチャ冷たい!ってか何で俺、こんな水ん中にいるんだ?

「じじじじじ爺様まままま。いいいいいいったたたたいいなななににを!!」

「起きたか奏志よ。富士の麓のこの霊泉で泳ぎ、日本中の地精の力を感じられる様になるんじゃない!ただし水の温度は-18度じゃから5分以内に感じられんと凍死だぞ」

「普通氷になるよねえ!!」

「南米アマゾンの何処か」

「さああの鰐の背中でワサビを摩り下ろして来るんじゃない」

「霊泉関係無いじゃん!!」

「関係ありまくりじゃ!此処も霊泉の一つでそこに住む鰐の背で摩り下ろしたワサビは最高の味になるんじゃない、さあ逝ゆけい!!」

「字が違あああう!!!!」

「スペインの闘牛場」

「今日は霊泉は関係無いがどの位出来る様になったのか確かめるとするかの」

「爺様、目隠しに手錠と足枷したこの状態で何をしますか?」

「な〜に簡単な事じゃ。その状態でバイソンと闘牛をして5分間逃げ切るか勝てば良いんじゃないよ」

「それって俺みたいなお子どもにさせる事じゃないよねえ!!」

以上が修行内容の極一部です。

5年後……………時間の経過は気にしないで下さい。色々あったんですよ、色々だね……………

「奏志よ、お前ももう10歳になり氣の扱いもワシを除いて鉄一族歴代最高位になった事じゃしそろそろ龍穴巡り以外の事もしようかの」

「それはそうと爺様、昨日蔵の掃除をしてたら隠し扉見つけてさ。

中に入って一番奥まで行ったら何か異様な雰囲気きふきの脇差が出て来たんだけどこれって何なの？」

袋に包んだ脇差を爺様の前に出すと何時もケラケラとした爺様の目つきが変わった。

「奏志、あの扉を通る事が出来たのか!？」

「うんそうだけど?」

「あそこにはわしが氣で封印しておった筈なんじゃがのお」

爺様は指で髭を撫でながらそう答えた。

如何なる力であつてもあの方法を除けば混沌カオティック・リアルとした実在の前では無意味に等しい。最も、爺様ならそれをしなくても貫通しそうだけど。

(笑)

「……ふう、いつかは教えるつもりじゃったから丁度良いか。奏志、よく聴くのじゃ」

改めて鋭い視線を送って来る爺様。そこには祖父としての陣内ではなく武術の師匠としての陣内がいた。

俺も改めて正座し直す。

「……この脇差は100年前にわしが世界48箇所の靈泉でわしの氣と各地の力を混ぜ合わせ出来上がったエネルギーを込めながら鍛え上げた対の刀の片割れでの」

100年前つて爺様いつたい歳幾つなの？

「でじゃ、出来上がった刀を試しに軽く振るつてみたら海が2〜30キロ程割れての、危険過ぎるんで蔵の隠し扉の奥に仕舞い込み、コイツのある場所の扉には全盛期の頃のわしが氣で封印を掛け刀も幻術で見えなくした」

ごめん爺様、俺の目にはバツチリ見えました。

「そして何時の日かその双方の術を突破した者に刀を託す事に決めたんじゃ。奏志よ！これからは剣術の鍛練に重点を置くから覚悟するのじゃぞ」

覚悟？そんなもの……

「覚悟なんてしてもしなくてもやる事は変わらないんですから今更ですよ爺様」

「かぁーっカツカツカッカ。確かに違くないわい」

あつ！何時もの爺様に戻った。

「で爺様、さつきは聞き流してたけど対になつてるもう一方の刀は何処にあるの？」

対の刀として鍛え試し斬りをした時点で封印したのならもう片方もある筈だが蔵の中にあつたのはこれ一本のみ。

「もう片方はわしの友人に預けてあつたんじゃが今はそいつの孫が持つておる。縁が有ればその内会えるじやろうから今は修行に専念

する事じゃの」

「分かりました爺様、一日でも早くこの刀を自らの手足の如く振るえる様頑張ります!!」

「うむその意気じゃ奏志よ。ではまず剣術の基礎知識として地下にある蔵書を全て読むのじゃ!!」

「はい!!………つてええ!!?あの扉を開けて直ぐに本の壁になつてる部屋の中の本を全部!!?」

「そうじゃ。読み終えねば剣術は教えんから教えて欲しければ早く読み終えることじゃの」

そう言つて爺様は俺に一つのボタンを持たせた。

「わしは今から旅行に行くんで暫くは連絡がつかん。読み終えたら氣を込めながらそのボタンを押すんじゃ」

とうつつ!!

と、空高く飛び上がり爺様は何処かに行つてしまった。

「……………」

ぴゅうううう〜と奏志しかない庭を風が吹き抜ける。

「……………まずは本の整理からか、はあ〜」

溜め息をつきながらも階段を下りて爺様の集めた本が置いてある保

っせ、っせっせっせ、っせっせっせ、っせっせっせ、っせっせっせ、
せっせせっせ、せっせせっせ、せっせせっせ、せっせせっせ、せっせせっせ、
せせっせ、せっせせっせ、せっせせっせ、せっせせっせ、せっせせっせ、
っせ、せっせせっせ、せっせせっせ、せっせせっせ、せっせせっせ、
っせ、せっせせっせ、
.....

あほお〜あほお〜あほお〜

空が赤く染まりカラスの鳴き声が聴こえる。

「一日中運び出し続けてまだ全部じゃないってマジで何冊あるんだよ!?!」

幾ら運び出しても本の壁が終わらない…軽くノイローゼになりそうだ。

「今日はこれ位にして運び出したの読むか」

一階に上がり運び出した本を見る。見える部分だけで見積もっても軽く500冊以上あるな、しかも全部ハードカバーのハリポタサイ
ズで……

「こりゃ普通に読んでたらこれだけで一月は掛かるな……」

いや読書自体は前からの趣味だから苦じゃないんだけどね、流石に量が量だから普通に読んでたら原作に間に合う気がしないんだよね。

「氣で身体強化して読むか」

意識を集中して氣を練り上げる。別に意識しなくても可能なのだがそうするとぶつちやけ燃費が物凄く悪い。どの位違うかと言えば同じ量の氣での持続時間がF1カーと低燃費車の差位はある。最もGNDドライブ方式の俺にとっては些細な事なのだがマラソンをクラウチングスタートで走り出す人物が皆無な様に何か氣分的に嫌なのだ。

とまあそんな話はさて置いて練り上げた氣を身体中に流して強化し、その上で更に目を強化する。

「よし強化完了。この状態でなら2〜3日で読み切れる」

最も近くにある本を手取る。タイトルは……

「え〜何々、時空管理局執務官資格試験過去問集……」

俺は本を開いて問題を解きながら黙々と読み進める。

タイトルに突っ込まないのか？そんな事、爺様と5年も一緒に修行してたら悟ったよ、『爺様のする事は考えるだけ無駄』ってね。

「はい終了。さーて答え合わせっつと」

本に備え付けられた回答と照らし合わせる。結果は……

「ギリギリ合格ラインか……まっ結果は如何でもいいし次ぎ行こ」

過去問集を閉じ次の本に手を伸ばす……………

2日後

「……んんん！これで最後っつと」

持ち出した最後の本を読み終えた奏志は身体を軽く伸ばす。

バキバキつと全身から音が鳴る。

「しっかし、まさかこれだけ読んで剣術はおろか武術に関係する本がゼロとは……」

明らかにネタと言える本も最初の過去問集だけだったしその他は世界各国の地理や歴史書、政治に経済とジャンルだけは豊富だった。

「爺様、学校の先生にでもなるうとしてたのかな？」

本を部屋の隅に積み上げながら呟く。爺様が教師……あれ？一瞬、魔法使いの集まる学園都市の長のポストにいる姿が見えた。

「……まっ、そんな如何でもいい事に費やす時間が勿体無いし次ぎ行こっ」

保管室へ新たな本を取りに向かう。

第1話 ギャグパート? いいえ、修行です(後書き)

お読み頂き有難う御座います。

色々と省略しまくってますがそれは徐々に明らかになって行く予定なので気にしないで下さい。

誤字・脱字・感想・疑問などありましたらどうぞ。

それではまた次回お逢いしましょう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8945y/>

とある世界の幻想書庫

2011年11月27日07時45分発行